

季刊 連句 第36号

平成四年三月一日発行



式目論 (南柏雜記 34)	1
芭蕉の「発句」と「俳句」	東 明雅 2

立机式と二十韻興行	4
式次第	
正式俳諧 次第・役割	5
立机披露記念俳諧之連歌 二十韻 捌 東 明雅	
二十韻十一卷 捌 東 明雅 下坂元子 下鉢清子 瀧川雅代...	6
名古則子 八角澄子 福井隆秀 矢崎 藍	
山崎一恵 若尾よしえ 三好龍肝	
立机式以後のことなど	豊田 好敏 12

脇三体	13
「蓑虫」付勝練習二十韻	14

第六回国民文化祭ちば91	
「水と緑とうたびとたち」連句部門あれこれ... 下鉢 清子	16
作品十一卷 捌 秋元正江 内田麻子 式田和子 下鉢清子	
杉内徒司 杉江杉亭 副島久美子 中川 哲	
根津美紗 福井隆秀 矢崎 藍	

芦丈翁聞書	21
-------------	----

第四十回 猫蓑会	24
歌仙七卷 捌 東 明雅 市野沢弘子 大窪瑞枝 坂本孝子	
副島久美子 中島啓世 中田あかり	

雁帛往来	29
新講座紹介	11

式目論

南柏雜記 34

雅

式目がこのごろ連句の世界ではやかましく論じられてゐる。若い人の間には、このように古くて、面倒くさいものは無視し、破棄しようという勇ましい論もあるようだが、もともと、この式目（具体的には去嫌い）は、我々の先祖が、一卷の中で輪廻を避ける為、苦心して考えた結晶であり、貴重な文化遺産とも言つべきものである。一概に無視したり、排撃したりすべきものではない。

私は数年前から、やや面倒で分かりにくい去嫌いの規則を、何とか現代的に整理出来ないものかと考え、数年前、これを単純化した式目歌というものを発見し、これをカードに印刷して弘めている。次の通りである。

- ①衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし
 - ②同じ文字神祇釈教恋無常夜分時分三句去べし
 - ③天象に鸞降物人倫や名所国名二句隔べし
 - ④魚と鳥獣と魚木と草や草と竹とはこれも二句去り
- この四首の和歌を覚え、実作の時応用すれば、別に面倒くさいことは一切ない。

解説を加えると、
①衣（ころも）・季（春・夏・秋・冬）・竹・田・船・

路・夢・泪・月・松・枕、以上の字が登場したら、五句隔てなければ、同じ字は登場できないというわけである。なぜ、これらのものを特別に五句去りにするかと云うと、これは古く連歌の時代からの伝統なのである。一つ位はこんな伝統を残しておいた方がよいと考えたまでである。

②一般の同字は三句去り、その他、神祇・釈教・恋・無常など、表六句に忌避されるものは、印象が強いから三句去り、また、夜分・時分は月との関係から三句去りにした。
③天象（月・日・星の類）・鸞（霞・雲・霧・煙などの類）・降り物（雨・露・霜・雪時雨・みぞれ・雪丸・雪の類）・人倫・名所・国名は二句去りである。これらの外、居所・山類・水辺・生類・植物・食物・器財など、凡そのものは右に準じて、原則として二句去りにする。

④魚と鳥・獣と魚とはいわゆる異生類であり、木と草・草と竹の異植物、あるいは異居所なども二句去りとした。右の式目歌四首を覚えただけで私は十分であると思う。それは私どもは同じ面はもちろん、一卷の中にも、出来たら同じ物、似たものは重複しないようにする主義であり、滅多に問題は起らないからである。しかし、物によって、時によって、同じようなもの、似たようなものが近くに現われる場合があることは止むを得ない。だから、去嫌いは許される限度を示すものなのである。

芭蕉の「発句」と「俳句」

東 明 雅

発句は「座の文芸」たる俳諧（連句）の第一句であるから、その一座の中で連衆に理解されるときもに共感されることが必要である。それ故に、発句には賓主の挨拶とともに、時節相応・その場への配慮が求められる。これに対して、新たに明治以後、発句から創り出された俳句は、俳諧の座から離れ、脇・第三以下挙句までの一巻から独立する。だから俳句は賓主の挨拶も、即興や滑稽などの要素も必ずしも必要としない。個に徹し、外に向かつて大きくひらかれ、不特定多数をその読者とするのである。

芭蕉の発句は、今日ではすべて芭蕉の俳句として鑑賞されているけれども、厳密には、脇句以下を伴う発句（立句）と、それを期待しないいわゆる地発句（今日で言う俳句）とを分けて考え、鑑賞すべきではなからうか。『おくのほそ道』の中でも、たとえば「夏草や兵共がゆめの跡」とか、「閑さや岩にしみ入蟬の声」とか、一句の想も形もあまりに完璧に近いものは、その上さらに脇句を付けることは、蛇足であり、発句を反って汚すこと

になる。言い方をかえれば、余意・余情を付ける余白が一句にないのである。「荒海や佐渡によこたふ天河」の句でも同様である。だから、直江津での俳席においては、この句の代わりに、「文月や六日も常の夜には似ず」という句を発句に、「露をのせたる桐の一葉」という脇句が付けられている。これは、「荒海や」の句は地発句としてはすぐれているけれども発句（立句）としては「文月や」の方が優っているという判断が、芭蕉自身にあったことを示しているのであろう。

元禄二年五月二十九日、大石田高野一栄の宅での歌仙の発句「五月雨をあつめて涼し最上川」には、「岸にはたるを撃ぐ舟杭」という脇をつけて一座の興行がなされたのに対し、『おくのほそ道』では、座を離れた形として「五月雨をあつめて早し最上川」になっていることでも了解されるところであろう。座の文学としての発句（立句）では一座の主たる一栄に対する挨拶として、「涼し」という賞美の語が用いられたのに対し、六月一日になって、実際に舟で下ることになり、日本三急流の一つをそ

の増水時に実際に下っては、「早し」といわざるを得なくなつたのであろう。

「改作の『早し』は『涼し』より遙かにすぐれているが、それだけにこの程度の力の弱い脇句では寄りつけないのだ」という山本健吉の指摘（『芭蕉その鑑賞と批評』）は、一応、俳句として見た場合は、「早し」という方がすぐれていると解すべきであらう。もちろん、発句として見た場合は、「涼し」の方が数等すぐれているのである。

明治以来、連句というものが俳壇の表面から消え失せていた頃ならば、発句としてよりも俳句としての価値を重視することは、あるいは当然のことかも知れないが、今後は、芭蕉たちの句を評する場合は、発句として評価するのか、俳句として評価するのか、すくなくとも、それくらいは区別はつけて欲しいと思う。

たとえば、「木のもとに汁も鱈も桜かな」（元禄三年三月）という句は、発句として、芭蕉が会心の作ではなかったらうか。この句は、伊賀上野の小川風麦亭で催された俳諧の発句であり、この句に、風麦は「明日来る人はくやしがる春」と脇句を付け、以下、良品・土芳・雷洞らとともに、四十句の一巻を作っている。だがこの一巻は彼の満足するところとならず、同じ伊賀の連中によつて、二の折以下を新たにした歌仙も伝えられている。

尤も、この歌仙が先か四十句のものが先だったのかは未だ検討の余地があるが、ともかく同じ発句で彼は二巻の俳諧を作ったのだ。これだけでも異例であるが、三月中旬、近江膳所に赴いた彼は、この句を発句に、珍碩（洒堂）・曲水を相手に三吟の歌仙で興行し、これが漸く芭蕉の意に叶つて、同年八月刊行の珍碩編『ひさご』に採録された。

木のもとに汁も鱈も桜かな

西日のどかによき天気なり

旅人の虱かき行春暮て

翁 珍碩
曲水

以下、芭蕉の作品のうちでも傑作の一つとされる一巻である。これで彼は満足したのである。

「三冊子」によれば、「この句の時師の曰く『花見の句のかかりを少し心得て、軽みをしたり』となり」と言つたという。「汁も鱈も」というのは当時慣用された「何も彼も」という一種の成句であつたというが、それを利用して、一句の調子を整えているのである。

この句を俳句とした場合、大した評価を得ていないのではないかと思う。それは誰もこの句を彼の代表的俳句として取り上げていないことでも分かる。しかし、発句は軽いのを好んだという芭蕉にとっては、理想的な発句だったのである。（校本芭蕉全集別巻月報より転載）

立机式と二十韻興行

平成三年十二月八日
於 深川芭蕉記念館

式次第

司会・進行 豊田好敏

- 一 開会の辞 中川 哲
- 二 主幹の挨拶 東 明雅先生
- 三 立机式 開始 中川 哲
- 四 新宗匠 紹介 中川 哲が各新宗匠の略歴を紹介する
- 五 免状ならびに文台の授与 東 明雅先生より一名ずつ拝受する 介添え 副島久美子
- 六 来賓の祝辞 大林 柚平先生 矢島 房利先生
小林しげと先生 内田 素舟先生
名古 則子先生 品川 鈴子先生
中川 哲
- 七 祝吟披露 豊田 好敏
- 八 祝電披露 岩井 啓子他
- 九 花束贈呈 秋元 正江
- 十 新宗匠代表による謝辞 仏淵 健悟
- 十一 記念撮影 正式俳諧用に席を改める
- 十二 正式俳諧 東 明雅先生が宗匠となり二十韻で行う
二十韻連句興行用に卓を作り食事を配る
- 休憩 三好 龍肝先生
- 十三 乾杯 十一卓となる
- 十四 二十韻の連句の興行 お軽勘平『旅立ちの段』 中川 哲
- 十五 祝いの浄瑠璃 豊田 好敏
- 十六 閉会の辞

正式俳諧

次第

- 一 席入り
- 二 配硯
- 三 献花
- 四 執筆呼び出し
- 五 文台捌き
- 六 俳諧興行
- 七 花前
- 八 献香
- 九 花の句披露
- 十 端作り
- 十一 吟声
- 十二 文台返し
- 十三 作品奉納
- 十四 挨拶

役割

宗匠	脇宗匠	副宗匠	副宗匠	執筆	知司	副知司	座配	座見	花司	香元	配硯	老長
東 明雅	秋元 正江	杉江 平朗	式田 和子	副島久美子	豊田 好敏	仏淵 健悟	上月 淳子	中田あかり	内田 麻子	市野沢弘子	原田 千町	中島 啓世

立机披露記念

俳諧之連歌 二十韻

冬 紅葉

東 明雅 捌

吟声のけふ澄み透り冬紅葉
 玻璃越しに見る庭の雪吊
 括り糸機の準備もとのひて
 お醤油注ぎを取って下さい
 ゆらゆらと灯火揺るる舟に月
 猫を抱き上ぐやや寒の膝
 恋人のブロンズ像を二科展へ
 智恵子そのまま其処に立ってろ
 酒蔵の似合ふ町なり北の国
 集印帳に満願の夢
 振り向けば薄翅かげろふ飛び交へる
 縁台将棋月も笑ふか
 ほてりつつ動悸押へるひと愛し
 そしらぬ仕草男不器用
 山梨は風林火山株上り
 ポリのタンクで鉱泉を売る
 定年後自転車こぎを日課とし
 石鹼玉吹く孫と競争
 鯉木も千木も万朶の花の中
 影もおぼろに暮れなづむ頃

啓世 彬亭 正江 和子 淳子 弘子 千町 好敏 あかり 麻子 元子 よしえ 澄子 雅代 義夫 一恵 政志 千雪 明雅 執筆

落葉浮く

東 明雅 捌

落葉浮く水に目だけを出せる河馬

師走のベンチ眠る浮浪者

塩むすびケチャップかけて食ふならん

納得いかぬことがいっぱい

名月も五十に近き終戦忌

美男蔓に副へし恋文

はちきんの好む南瓜と若き知事

ホテルの客に見せぬ観音

うやむやのままにてちよんと柝を打ちて

浮世の果は粗大塵芥なり

畑ごとに抜きすてられし夏蕪

追っかけてくるごきぶりの月

夢枕三億円をうまうまと

だまし上手な下戸の口下手

化けてでるまでに醜女の深なさけ

どっと返品隆法の本

心臓の薬で頭の毛が抜けて

紙風船にこめる溜息

神のみ伊勢の国原花吹雪

弥生の山にひびく囁り

※はちきん 土佐高知の男勝りの女性をいう。

冬の花

下坂 元子 捌

文台に冬の光の溢れけり

風情添へたる雪吊の松

散策の池を巡りし刻ならん

犬連れし子と口笛を吹く

月天心高層ビルの新都心

恋のやつれか漸寒の影

温め酒もう一杯と思ひ差し

ピントの合はぬ写真届きぬ

蓼科山彼方ふはりとグライダー

長編小説宿に鐘詰

河童忌の細き腕に針のあと

烏賊釣舟の水尾ゆらぐ月

香港に贗弗どっと出まはりて

ボデイコン娘の怖い誘惑

明荷昇きなれどごっつあんひたむきに

ひとつぶの種土にこぼれし

「夢」とのみ大幅かかる書院床

媼はたはた蕨餅食ふ

花爛漫十三詣のすまし顔

谷から谷へ小綬鶏の声

下坂 元子

加藤 治子

本屋 良子

北村 良輔

中川 哲

治 哲

哲 治

輔 良

良 哲

哲 良

同 治

同 治

哲 治

輔 良

良 輔

輔 良

輔 良

元 治

治 良

良 治

龍の玉

立机を祝ぐ

下鉢 清子 捌

冬麗ら

瀧川 雅代 捌

曙光に輝く三粒龍の玉

雪囲ひする蹲踞の前

コンチエルト新譜の音の揃ふらん

紅茶コーヒー丁寧に淹れ

迎へ火の八尾の里に月待ちて

後の袷で逗留の客

甘柿を届け娘の手を握りしめ

3K無縁この人が好き

○と×相殺させて当選し

住みついてゐるお隣りの猫

車椅子押しつつ語る星の夢

探石会はまた下戸の会

義経の落ちたる村は塚古び

ソーブランドのネオンちらちら

水着の背もたれ合はせし浜の月

夏の賞与の見積りが済み

たまさかの揮毫の筆の心地よく

正東風に乗ってローリースケート

セーラーの髪に花びら花の徑

分校の窓初蝶の影

下鉢 清子

橋本 妙

佛淵 健悟

市野沢弘子

鈴木美奈子

松本 碧

内田 素舟

妙

碧

弘

悟

清

舟

悟

弘

美

健

美

碧

妙

冬麗らわけてゆかしき立机かな

開き初めたる蝦蛄葉仙人掌

湖に遠く舟漕ぐ影見えて

缶珈琲を息もつがずに

未だ慣れぬビデオ構へる月の宴

秋袷の女そつと引き寄せ

うそ寒の男悩ます泣きぼくろ

パールハーバー過ぎし傷痕

ブロッケン雲間に映る我が姿

十字を切つて猫と目が合ふ

水族館はんざきじつと動かざる

西瓜畑の盗人に月

スキャンダルほほかむりしてロック歌手

真正正銘あなたさまの子

若・貴の血筋のよさに応援し

酢のものの煮物つまむ塩豆

故郷の山懐しみ独り酒

燕来るころ兄も歛持つ

大学のテニスコートに花吹雪

たつぷり朝寝休日の昼

瀧川 雅代

内田 麻子

諏訪 欣二

木場田文夫

子

夫

代

子

二

夫

子

二

夫

同

子

二

代

子

夫

二

新宗匠を祝ぐ

時雨るるも

名古 則子 捌

八角 澄子 捌

口切や宗匠に祝ぐ雪月花

冬暖かく和む会席

ペルシヤ猫毛の房々ととび出して

手をあげ返事利発さうな子

特訓の塾ある寺の十三夜

夫婦の銀杏よく実るなり

探偵てふ秋を無粋な役まはり

黒帯のままきゅっと抱かるる

隅田川流れ流れて橋いくつ

広告塔にビール泡型

夕焼に終戦の日を思ひやり

肋間神経痛といふべし

パリの娘のコレクトコール泣き声で

PKOと米の輸入と

入り混みの岩風呂栗炭があきれば

知らせないでよ浮気うんぬん

公明党政教分離なやみ濃く

小綬鶏ちよっとこいとしきりに

紅枝垂花びらにある月のかけ

飛び石わたる神苑の春

大林 柚平

東 郁子

秋元 正江

名古 則子

則 郁

江 則

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

江 郁

時雨るるも風情添ふべし立机の賀

挨拶交す石露の庭

水菓子を玻璃の器に盛り上げて

絹のクッションふはり長椅子

思ふこと背中に負うて月待たん

稲架の蔭より鼠鳴きする

夫婦とは見えぬふたりのぬくめ酒

荷風スタイル下駄のお散歩

これよりは定年浪人氣俣にて

戦の跡を尋ねゆく夢

パーゴラにいつも来てゐる黒揚羽

プール開きの肌白く月

占ひ師恋は成就と太鼓判

女難剣呑俄信心

落ち葉積む葉っぱのお金まじるやら

ゼーゼー云はせ坂上るパス

並びある魚拓の額の我に似し

厨うららかこねるばた餅

宮殿の皇女すこやかに花の中

「春鶯転」の調べゆかしき

八角 澄子

海野 海砂

雑賀 遊

村田 富美

水沢 魚乙

遊 砂

美 遊

乙 遊

砂 遊

同 遊

美 遊

砂 遊

乙 遊

砂 遊

遊 砂

砂 遊

美 遊

同 遊

乙 遊

同 遊

冬ぬくき

三宗匠

福井 隆秀 捌

矢崎 藍 捌

冬ぬくき大川端や立机祝ぐ

紅葉散り敷く庭の一隅

児に追はれ猫音もなく横切りて

厨のほひ長電話置く

ぽっかりと待宵月の顔を出し

お職の美妓と新酒酌みつつ

捨扇ダイヤの指輪2カラット

バイトで稼ぎ息子パリーへ

愛想よきちびの辛相多事多難

白を黒とはよくも言ったり

住み古りし借家の縁の蝸牛

月に汗しつ自他場じたばた

振り向けば君の微笑みフルムーン

寄り添ひ歌ふ演歌恋歌

あれこれと教養講座はしごして

写経の墨の匂ふ暁

戦後早や茫茫として五十年

畑打ち返す農夫背を曲げ

故郷の雑木林の花を賞で

霞たなびく陵の島

福井 隆秀

杉江 杉亭

若松 香

篠原 達子

亭

秀

達

香

秀

亭

香

達

亭

香

秀

達

秀

亭

杉江 照代

香

三宗匠けふ出で立つや都鳥

地にくつきりと雪吊りの影

忙中閑子等の鼓に聞き入りて

銀のポットで熱い紅茶を

ピルの上青く透きたる昼の月

幸うすき肩秋の大島

恋の身の錆を世に問ひ末枯れし

留守番電話笑ふくつつ

民族のゆさぶり激しゴルバチョフ

宝籤には長き行列

鱈に鯖石持いさき釣り自慢

味噌も坊主も月に冷酒

戦果でどっこい生きてる腕組んで

シャンゼリゼーはペアで満開

とろとろと愛とジェラシー煮えかげん

出ぬ声しぼりどこの野良犬

病名を医者には教へずじれったく

春泥とばし走る自転車

遠き嶺ひとかたまりの花朧

茶店に憩ふ草餅の鉢

矢崎 藍

上月 淳子

峯田 政志

武村 利子

副島久美子

淳

志

藍

久

淳

久

利

利

淳

利

志

淳

利

久

志

十三佛行
都 鳥

賀立机

三好
龍肝 捌

都鳥平談俗語ことづてん
はらりはらりと舞ひし初雪
逆光の月にビデオをかまへるて
怡紅緑中ひそと沈みぬ
温め酒井桁緋の娘が運び
オペラもどきに心うちあけ
とも角も艶懺悔する御佛前
袍の木履が鳴らす玉砂利
蒜と韭のお粥を差入れる
アメリカチームエイズ恐れず
辛歳に猿が賞とる未年
一石橋で雛はほほゑみ
挙 都戸に未摘花の香るらむ

三好 龍肝
式田 和子
三浦 悟朗
赤田 玖實子
杉山 寿子
佐古 英子

和 肝 朗 英 和 寿 玖

註 十三佛行

表裏挙句の三段で構成。表は五句で二季、月は必ず出すこと。恋は出るにまかす。
裏は七句で月は出るにまかす。挙句は一句。一卷中に四季を配し、花・雪は必ず出す。余のことは連句の基本及び式目に準ずる。

A・C・C 講座（連句入門）

講師 信州大学名誉教授 東 明 雅
「寒 雷」同人 秋 元 正 江

この講座は昭和56年から続いておりますが、今回新人を迎えるために、従来の水曜日を土曜日に変え、また、講座名も“連句入門”と改めて、初心の方本意の授業をすることになりました。連句に興味をお持ちの方の積極的参加を期待致します。

〈テキスト〉「連句入門」東 明雅 著（中公新書）

〈参考図書〉「季寄せ」（文藝春秋） 「連句辞典」東 明雅 著（東京堂）

期 間 1992年4月11日～9月26日 全10回（8月は休み）
第2・4土曜日 10：30～12：30

受講料 全 24,000円（初めて受講される方は入会金5,000円が必要）
入会金、受講料、教材費にはすべて消費税3%分が加算されます。

場 所 新宿住友ビル48階 朝日カルチャーセンター（受付は4階）

立機式以後のことなど

豊田好敏

昨年十二月八日、猫養会主催の三人の新宗匠立機式を無事に、そして盛況のうちに終了し、事務局の一端を受け持った私として、ほっと肩の荷を下ろしたところでした。

東明雅先生をはじめ、新宗匠の皆さま、実行委員の中川哲さまのご指導を心から感謝いたす次第です。

さて、平常の感覚に戻り、いろいろと世間のことを見まわしますと、何となく世情は騒然として、俗に言うバブル経済がはじけて、気がついたらかなり後戻りしていたという事でした。

詩人にして駐日フランス大使を務めたポール・クローデルは、「極めて興味ある太古からの文明を伝えている日本民族」と、その著書で讃えた日本人が、平成のいま、経済のことで世界に優位を示している間違いが、集結して世紀末を迎えるような気がしてなりません。

それにしても立機式の会場となった深川・芭蕉記念館。ふと思ったことは芭蕉翁は「立機」をされたのだろうか。

初期の『季刊連句』の中に「寛文十二年（二十九歳）伊賀上野から江戸へ下った芭蕉は立機して、地位も安定してきた延宝八年（三十七歳）の冬、杉山杉風の世話で深川の草庵に居を移し……」とありました。

それやこれや感慨にふけていた昨年の暮れ、私の座右

の書『氷川清話』（勝海舟晩年の語録）を拾い読みしていたところ、興味ある一文を目にいたしましたので、ご照会かたがた拙い感想を述べることをお許しください。

原文『おれ（海舟）は平生から「芭蕉という人はどうしても尋常のものでない。その余徳が深く人間にはいつていることは、ただ発句の高妙なる故のみではあるまい。きつとほかに何かそのわけがあるだろう」と思っていたところ塚本定次（江州の男）のいうには、いわゆる近江商人なるものは、じつにその芭蕉の教導訓示によりてできたものだろう。このことを聞いておれは積年の疑いがここに始めて氷解して、大いに気が清々とした」とありました。

そして別のページに、芭蕉が教えた近江商人の商法が記載されていました。(1)バイタリティーに富み、(2)優れた情報力を備え、(3)柔軟な発想と思考力をもち、(4)情に左右されない合理精神をもち、(5)優れた決断力をもち、(6)果てし無い上昇志向をもつ、の六箇条です。

これから先は私の推測ですが、当時ようやく流通市場が活発化した元禄の世に、芭蕉翁は俳諧の旅を兼ねて、今でいうセミナーの『流通経済講座』に招かれて、東北から北陸路へ、関西へと足を伸ばされたのではなからうかと思いなんとなく愉快になった次第です。

脇 三 体

雅

三冊子（わすれみづ）に、「猿蓑に脇三つを三体に仕付けてなし置きたり。心付けてみるべし」という芭蕉の語が載っている。猿蓑四歌仙のうち、「梅若菜」の巻だけが芭蕉の発句に乙州の脇ではじまっているが、その外の三歌仙はすべて弟子の発句に、芭蕉が脇を付け、脇の付け方の手本を示したというのである。まず、その三巻を紹介しよう。

① 鶯の羽も刷ぬはつしぐれ

去来

一ふき風の木の葉しづまる

芭蕉

② 市中は物のにほひや夏の月

凡兆

あつしあつしと門々の声

芭蕉

③ 灰汁桶の雫やみけりきりぎりす

凡兆

あぶらかすりて宵寝する秋

芭蕉

三体とは何か。これについて古来からいろいろ説があった。能勢朝次氏の「三冊子評釈」によれば、①は仮名留、②は打添付、③は対付の格にあたるというが、南信一氏の「三冊子總釈」には①が逆付、②は位付、③は打添付という。もともと連歌の頃から脇五体というものがあり、相對付・打添付・違付・心付・頃留りを言うとき、また、一句の止め方には韻字留と手爾波留（仮名留）の別があり、また、付方としては、物付・心付・余情付（句・響・位・面影）がある。両氏が指摘しておられるのは決して誤りではないであろうが、芭蕉の真意からは離れているのではなからうか。

その外、高藤武馬氏「芭蕉連句鑑賞」は①を逆付、②を心付、③を打添付とされ、安東次男氏「芭蕉七部集評釈」は①ひびき、②におい、③うつりとしておられる。

土芳は三冊子（白さうし）において、「対付・違付・うち添・比留の類、むかしより云置所也。……」と言っているから、頃留（句の終りに頃という字が付く）を除いた、対付・違付・打添付の三つにそれぞれがあてはまれば、一番うまく行くのである。しかし、③が打添付であるのは確であるが、①は対付としても、②を違付と言えるかどうか疑問である。

もともと、この三歌仙はすべて発句が人情無（場）の句である。これに脇句を①は人情無（場）の句で受け、②は人情他の句で受け、③は人情自の句で受けている。ここに初めて着目されたのは故清水瓢左氏で、昭和四十年の俳文学会で発表されたのが初めてであった。

これは、発句が人情他の句である場合も、人情自の句の場合でも、脇の句では人情無（場）・人情他・人情自の三通りで受けることができ、それ故、右の芭蕉の句は、すべての脇句の典型となり得るのである。

脇句は打越を考える必要がないから、発句が何であろうと、人情無（場）・人情自・人情他、いずれの句も付け得るということは、現代の連句界では常識であるが、元禄三四年のころは、まだそこまで進んでいなかったようで、その点、芭蕉がことさらに三つの脇句の例を出したのは画期的なことだったのである。

蓑虫

付勝練習二十韻

東明雅

蓑虫の音を聞に来よ艸の庵

初めて涼し掛けし濡縁

海岸線波頭真白に月ありて

飛ぶやうに行くホバークラフト

心太芥子きかせてすすり込み

制服脱いだ彼とくつろぐ

さりげなくお守りだよと犬はりこ

回教国は酒も御法度

バザールに水煙草吸ふ男たち

すこし疲れて美術館出る

見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく

客待つ暖炉あかあかと燃え

据ゑ膳は食はぬと言った嘘もばれ

電算三課セクハラの罨

ゴミ袋つつく不気味な烏たち

ちよいとそこまですててこの月

やあいようはてな名前が出て来ない

仔猫を抱いて満面の笑み

切日 締 20 句 月 4 投

芭蕉 正雄 千遊 淳子 よしえ 元子 和久 良子 正雄 鋭太郎 達子 志げ子 藍 妙 妙 達子 智子

前句は仔猫を抱いて笑いこぼれている人、その中に、自然と明るい、あたたかい、邪気のない、庶民的な気分が滯っている。だから、どのような花の句を出そうとも、この余情を無視した句は失敗であろう。その点、1はたしかに明るくはあるけれども、前句に呼応するものが何もない。2はむしろ冷たい感じである。3にいたって漸く気分的には付味のよい句が生まれたが、せっかくの嬰が熟睡していは、前句とどう結びつくか問題であろう。4はおもしろかった。おそらくまだよちよちの幼児であろう。だから分別もなくお隣りの花見客のお重にも手を出すという、まことに明るくて無邪気で、前句にびったりであり、いかにもその状況が目には浮ぶようだ。最初はこれを治定しようと思つたほどである。5これはおもしろい付けである。虱は現在あまり居ないけれども、昔は隠逸の人の風格を詠む時使われたらしい。猫を抱いて虱を気にする風狂の人の面影が浮かび上がる。序ながら芭蕉に「夏衣いまだ虱をとりつくさず」の句があるが、そのもじりと見てもおもしろい。6これも現代花見風俗の一端である。前句とあわせて人のよい若いサラリーマンなどが浮かび上がってくる。7この句も明るさ、庶民的なところが浮かび上がっている。宴の一人が猫を抱いているのだから。その辺りが曖昧である。8この一巻に釈教の句が無かったので、醍醐の花と考えられたのであるが、前句との付味が悪い。9一句の意味はよく分かるけれども、前句とはどう結び付くのか、あるいは花便りの中に、仔猫を抱いた写真でも入っていた

十九句目

治定

花びらを糸に連ねて首飾り

1カラオケの群あちこちに花筵

2滑るやうにベントッ消えゆく花館

3乳母車嬰の熟睡に花吹雪

4花の下よそのお重に手を出す子

5花衣払へど虱見当らぬ

6花筵ひろげ席取り無聊なる

7盛り上がり俄飛び出す花の宴

8花おぼろ抜きて醍醐の塔聳ゆ

9ささやかな家を建てしと花便り

10老二人祇王寺ひそと花の中

11路地奥の行き止まりなる花大樹

12花の奥サイクリングの列が消え

13夕刊が早目に届く花便り

14洛北の寺は万朶の花の中

15花見客あふるる旅の土産店

16西行の庵訪ねん花の寺

17花の奥かすかに見ゆる火燈窓

18果見えぬ花のトンネル遍路来る

19一通は根尾の里より花便り

20クワルテット集ふ館の花明り

21旅土産出せば花びら付いてゐし

秀子

のか、不明である。10 述懐と釈教と旅と花を一句の中に収めたのはお手柄であったが、8と同様、付味がよくない。11 同じ花大樹を出すにも路地奥では、前句の仔猫と位が合つて、その点はよいのであるが、ここでこのような場所を出す、大打越の、「ちよいとそこまで」から何か一続きの景にもなりかねない。12 これは？と似たような景で、2よりはあたたかである。けれども、前句とどのようにつながるか不明である。13 早目に届いた夕刊に花便りが出ている。それを猫を抱いた男が満面に笑をたたえて読んでるわけであろう。14 は8と殆んど同工異曲。15 は7に近い。16 この句も付味がよくない上、庵という字は発句にあるので失格である。17 火燈窓は禅宗の寺にある上が狭く下が広がった形の窓。猫を抱いて笑う気分と禅寺では全く余情に通うところがない。18 これも気分・状景、全く前句に付かない。19 花便りの句は9にもあった。20 クワルテットは四重奏団、この中の一人が猫好きなのか。21 これは付いている。旅土産を満面の笑みをもってよろこんでいる子供たちの姿が目につかぶからである。さて、治定の一句、花びらで首飾りをしてよろこぶのは子供であろう。その点で4や21とともに、よく前句に付いているとともに、この句は考えようによつては自の句にもなりかねない。そこに転じの要素が含まれていて、次の挙句が出しやすくと考えた。

挙句は三春の句を頂戴したい。人情は有つても無くともよいが、人情の句ならば、人情目の句である。

第六回国民文化祭ちば91

「水と緑とうたびとたち」

連句部門あれこれ

下鉢 清子

「咲かせよう未来」のテーマの許に、幕張コンベンションセンターをメイン会場とした国民文化祭ちば91の、文芸部門のサブテーマは「水と緑とうたびとたち」。連句の部は十一月二十二日の房総めぐりと前夜祭、二十三日に東明雅先生の講演と実作というスケジュールで、三年前から準備に取り掛かっていた。連句が国民文化祭に取り上げられるようになって千葉は三回目、近頃の連句興隆の中、盛り上げ成功しなければと、実行委員会を組織、顧問に東明雅先生、実行委員長は今泉宇涯先生、副委員長は上田溪水氏と私の担当となり、各部の責任者やボランティアのメンバーも決定されて、緊密な連絡と会合を持ちつつ進められていた。手初めは作品募集要項作りからで、以後は途方も無い準備ばかりを要する仕事の連続、最終年の91年は出突っ張り状態となった。房総巡り案と宿泊施設の二転三転に加えて下見、応募作品の開封は序の口で、

八百五十一篇の作品のコピーを選者に発送等々、数えることもできない難事の殺到で、老骨はフル回転させられた。特に悩まされたのは実作申込者と宿泊者の数が猫の目のように代り、実体把握の難しさ、この出席者の変動は最後まで大いに影響し、席割表作製、大会要項や作品集作りの責任者である私の不眠症を誘ったのである。右往左往している内に二十二日、ホテルグリーンタワー前から、房総めぐり参加者をバス二台で送り出すことから本番開始。三々五々到着の宿泊者や前夜祭参加者を、門外不出にしていた愛嬌で出迎え受付へ宿泊手続へとアドバイスしつつ、前夜祭の出演者「船橋ばか面踊り」の夕食弁当手に走ったりする。「船橋ばか面踊り」の少年少女の芸に魅せられたのは五年前、前夜祭の演出には非と勧めた責任上、大層気になる種目となっていた。十八時から開幕となった立食パーティーの、人々の間を縫って踊る子供達の間踊りは、案の定全国から参集した連衆二百四十名を魅了したのである。多くの来賓の方々からご祝辞や輜いのご挨拶を頂戴したが、中でも暉峻康隆氏の「格の高い立句の必要性」は心に響いた語であった。

翌二十三日は幕張コンベンションセンター国際会議場に於て連句大会が開かれた。早朝より、三百名の参加者が海の動物を席名とした四十九席に分かれて納ると、皮切りは応募作品の表彰式、文部大臣賞以下八賞の顔触れの中には、千葉市長賞の下坂元子氏、選者賞の秋元正江氏のお姿もある。続いて明雅先生のご講演「恋句の作り方味わい方」。「恋句は俳諧の秘鑰(連句の文芸性の秘密)を解く鍵」と、芭蕉の恋句から始まって現代の恋句の面白さを、例句を挙げて懇切丁寧に解き明かされる。既に「芭蕉の恋句」(岩波新書刊)の著書をお持ちの明雅先生、連句の山場の恋句の付け味と表現の妙味を解き上げて、連衆を艶冶な世界へと誘ったのであるが、先生のご講演の結果は早速実作に生かされたようである。ちば91の連句大会が大成功裡に閉幕した裏には、県当局関係者のご協力に加えて、日夜努力されたボランティアの方々のご尽力大なるお蔭と御礼申し上げるものである。国民文化祭実行委員会は滞り無く終わりに解散したが、私にはまだ本年に持ち越された入選作品集と、当日作品集の仕上げという仕事が残されて、目下校正中である。

第六回国民文化祭ちば91作品

半歌仙十巻 歌仙一卷

平成三年十一月二十三日
於 幕張コンベンションセンター

冬の渚

秋元正江 捌

一望の冬の渚や未来都市

きたぐに早も渡る初鶴

小抽斗端布とり出しつれづれに

ピアノ連弾譜面揃へぬ

吾子の云ふ「西瓜の尻のお月さま」

菊焚く匂ひしばし漂ふ

正江

元子

利子

雅子

由子

鳩子

石路咲いて

内田麻子 捌

石路咲いて安房の入江の海青し

鶯が輪を描く冬の灯台

伝統の木彫の技を受くるらん

子のコレクションジャズのCD

青銅の少年寂と望の月

色なき風の頬を撫で行く

麻子

郁子

洋子

好敏

弘子

郁

小六月

式田和子 捌

幕張の水と緑や小六月

続く渚に白き初鶴

外国の若人あまた集ひ来て

髪打ち込む音の丁々

待宵にたっぷり配る握り飯

推理新刊秋の灯に

和子

健悟

よしえ

幸子

千恵

悟

菩提寺の庫裡に昇き込む今年酒

ながら族には読めぬ哲学

キャンパスの肩で風切る乙女たち

ゆるる譲らぬプライドの恋

故郷の若狭さば道病得て

草のあはひに潜む玉蟲

月涼しのれんに付けしおもり石

木刀振れば齢を忘れる

三猿の教へのいまだ身につかず

田楽を食ふ異国のひと

花吹雪世に転生のありしてふ

むらさき茜晩春の空

はづれ馬券舞ひて踏みつつ秋の暮

ロートレックの画のやうな女

留学生何時しかヒモになり下り

三つ子生ませて乳母車押す

弁天の手洗の小銭いろいろに

もとの元首の栄枯盛衰

月昇り友が見舞のまむし酒

袴すずしく囲碁二十年

とり上げしファミコンそとやってみる

故郷の山笑ひ初む頃

折々は栗鼠も遊ぶか花の城

ふと気がつけば春の虹立つ

複製と知りつつ名画冬支度

山の姿の変はこの頃

お隣の婆も借り出す救急車

我が指定席猫にとられる

酒の上昔のひとつと間違へて

ちよっと太めが好きとセクハラ

羅を月にはにかむ尼十九

ひび割れ鉢にきよろり蘭鏡

手土産に丁稚に持たす自前物

温かな陽を背にうけつつ

俳諧の座に散り込みし花吹雪

窓を斜めによぎる蝶々

恵

幸

え

和

幸

恵

悟

え

恵

え

幸

悟

房総の国

下鉢 清子 捌

歌仙 べカ舟

杉内 徒司 捌

冬浅き雲の白さや房総ふさぎの国

紅葉散りそむ沼の岸々

ミシン踏み手毬と遊ぶ猫もゐて

ひとり暮しを自由気ままに

おしゃべりの並んで仰ぐ宵の月

香りの高き新酒酌み合ふ

秋祭あきまつり氏子総代忙しく

電線はみな地下に埋められ

「浦島」も「きす」も席名連句の座

あの人たしか初恋の人

ホテルキイ夫はなしと誘ひたる

洋車やんぐるまに乗りて走る露地裏

月昇る青き簾を透しては

のっぺらぼうが千羽鶴折り

新首相景氣先行不鮮明

楽焼茶碗どれも凸凹

勾欄に花美しく枝延べて

風船放す児等の歓声

清子

弘子

さとる

時子

淳子

佳子

淳

弘

る

住

淳

時

弘

清

淳

る

佳

時

幻となりしベカ舟冬がすみ

ビルの谷間に鳴き残る虫

納豆汁社員かっこみ賑はひて

遅参を詫げる間もあらばこそ

小さき手の招きに今日の月のぼり

ほのと匂へる黄菊白菊

沈黙しんもくの二人の前に焼リンゴ

ふんはり着地彼のハートへ

すりよりて甘える猫を追ひ散らす

債権国の誇り持たし

ポンコツの車置場に髭男

夏木立にも似合ふ三日月

武者人形金鶏が光る神武帝

洗ふにあらず米は磨ぐもの

呆けるにはまだ早過ぎるもの忘れ

手配書貼らる交番の壁

散る花に御喜捨申さん辻の僧

初耐焼けば焦目つけすぎ

徒司

達子

あかり

均

節子

志げ子

司

達

志

均

均

均

均

均

均

均

均

均

春はるの風邪薬の色の美しく

頼みの籤はあした抽籤

証券マンしつこく買はせゴミと呼ぶ

日本たたきはこれまででせよ

愚図ぐずがチャダメ自動改札すぐ閉まる

路地を曲れば変身の時

高級酒すすめ懐きぐりけり

見飽きた裸身まとも見たがる

民謡の採符に訪ひし平家村

どこをとつても平凡な犬

あざやかに懐紙捌かる月の句座

軒に吊りたる鈴虫の籠

秋場あきば所も若手力士を応援し

三段腹につづく白腰

湯治場の朝市へゆく下駄の音

加賀の訛は艶にやさしく

留学生Gペンで書く花便り

かげろふ野路に旅の出立

り

り

り

均

均

均

均

均

均

均

均

均

均

均

均

均

均

均

冬障子

杉江 杉亭捌

葛西沖

副島久美子捌

菊の宴

中川 哲捌

開け放つ紫烟草舎の冬障子

残る紅葉の散らふ庭石

弦楽器合奏しづかにはじまりて

埠頭に泊つる巨船見学

月懸るビル高々と窓あかり

背を丸くしてうそ寒の人

杉亭

冬乃

明雅

淑子

閑滴

雅

葛西沖富士を遙かに冬の靄

ビルのはひに飛べる綿蟲

方眼紙夢の構図を描くらん

盛りたつぷりの学食をとる

腕白を肩車して仰ぐ月

ころりと落ちる垣のむくろじ

久美子

良子

千町

政子

譲介

良

菊の宴月に白浪似合うたる

一声鳴くか枝の色鳥

障子貼る糊煮る匂ひ漂ひて

床に置きたる楽焼の壺

いきいきと悪戯っ子の眼が動く

蟬生れたり庭の広々

哲

志津夫

遊

俊子

澄子

文夫

鮭番屋守りて酒をひとり酌む

よき便り付け伝書鳩とび

日本語でまづ覚えしは「とても好き」

西郷どんが睨む嬉吏

やうやくに念願果たしビデオ買ひ

三社祭の上に澄む月

夏風邪の孫のお守りも骨が折れ

勝手口から煮物届ける

P KO 国会討論もどかしく

蜂の巣箱のここにかしこく

老匠の丹精こめし花大樹

春爛漫に幕を張る宵

寸余なるマリア観音諸霊祭

彼女と撮りし写真大切

従兄妹どうし我儘どうし好き同志

行き先決めずジャンボジェット機

四面楚歌米問題で立往生

金魚ゆらゆら水槽の中

月涼し遠来の友里なまり

足の弱りは気の弱りにも

老猿の群を離れて毛づくろひ

春の嵐も漸くに止み

盃にひらと浮べる花を酌む

連句一卷挙げる野遊ひ

町

政

町

介

久

介

政

介

町

良

町

良

コココーラクリームソーダかき氷

地震に驚きつと縋りつく

襟足のはくる微かにうぶ毛立つ

とどのつまりが借老同穴

永田町派閥の論理のし歩き

冬の金魚は深く潜める

陵を訪ねて哀し寒の月

マウンテンバイク荷物嵩高

右左インテリジェントビル並ひ

むかし話に遠蛙聞く

碑を背にして佇てば花しとど

うららに過ぎる平成の日々

遊

澄

哲

志

文

遊

遊

俊

遊

俊

澄

文

志

秋風

根津 芙紗捌

小春

福井 隆秀捌

潮騒

矢崎 藍捌

秋風に石を歩かす石屋かな

海坂はるか月代の道

壁つたふいとどを友に酒酌みて

郷土芸能役付けの番

あすの約引き延ばしをりまたあした

光と影の首都の夕焼け

芙紗

篤子

友子

道代

賢治

幕張の海も凧ぎたる小春かな

冬の浜辺に探す貝殻

喫茶室クラスメートの集ふらん

自画像らしき壁の額縁

たそがれの松の色増す十三夜

やや背を丸め鳩を吹く影

隆秀

律乃

雅代

恭子

啓世

潮騒はありやと上総冬の旅

凧渡り高きクレーン

玩具箱部屋いっぱいにぶちまけて

膝の肥え猫大あくびする

黒松の枝越しに見る庵の月

新蕎麦を打つ主一徹

藍

治子

京子

光子

寅一

寿賀

遠い日の夢は儂く消えなんと

わたし自身が変はらなければ

膨大な資産を楯に里帰り

地獄の沙汰も金次第とか

万巻の写経で建てし塔金堂

成人病にベットも悩み

パスワード入れ替へ忘れ操作する

未来にかける幕張メッセ

小春日の暮れて雲なく月昇る

ときに華やかときにしっとり

残花より残花に戻る回覧車

蝌蚪の群る池の片隅

片口のどぶろくぐっと飲み干して

矢場の娘に贈る簪

フォーカスにホテルの現場押へられ

家路を急ぐ塾がへりの子

詣でたる文殊菩薩に絵馬納め

茶翹ごきぶりうづくまる隅

月上る縁台将棋王手かけ

笑ってをれぬブッシュ・宮沢

しゃっくりの封じ薬を忘れ来ぬ

ふらここ漕げば教会の鐘

花万葉石垣残す城の跡

山脈遥かかかる初虹

文化祭友の載りたる地方版

何部もコピーするラブレター

騙されたふりして騙すテクニシャン

生き霊となる女の逆髪

軒先の風鈴ちりとかそげくも

葭戸に映る寝ねがての月

とり返しつかぬ何かをしたような

米にまできた世の自由なり

ミニが好きアクセル踏んでヴァンサンカン

おーや穴から蛇のお出まし

昇進の盃挙げて花筵

山山頻る鶯の声

治

京

光

藍

寅

光

藍

寅

賀

同

光

治

芦丈翁俳諧聞書(Ⅲ)

N (承前) 新月並派だとか、天明の鎧が脱げねえとかいうような事をいわれて、実際そんな風で、仕舞にはわしらにしても、まあ困った方で、中途で逃げられもしなくて、それからそのうちに何だか、自分の方から

出身の伊東月草というね、あの人が「草上」という雑誌出してたもんだで、それからその仲間になって、現在の梅の門氏(金尾梅の門)のやってるのは、その系統で、そのあとについて来た人だね、ウーン、それで伊藤松宇さんとの両吟でね、たまたま途中で、文音でやってたもんだでつかえるだね。雨の句の打越に月のかんかんと照っている琵琶法師が、背を向けているというよな句だもんだで、雨の打越へ月じゃ困ると言ったところが、そんな事はねえと、古人にも例があると、などと言って例をあげてまあ反駁して来てね、それで一頓挫したその例なんぞ、どうだったら、「生駒きづかふ綿とりの雨」ちうのがあるだ。それら現在雨降っちゃいねえだ。そだから月が打越にあってもね(註 有明高う明はつる空)、「生駒きづかふ綿とりの雨、河内あたりの

ね、生駒山では、どうも雨が降りはじめたと言って、急いで綿を取ってると、いう句だもんだで、それは月の打越になってもね。決してかまわねえと、そな事と、仲々鼻っ柱の強い人でね。

H 松宇さんですか。

N エ、それから、やがてまあ、「銀燭に背を向けし琵琶法師」と直して来たもんだで、それから又運んで、そしたところが、「ちる花の音きくまでの静かに 松宇」の次に、わしがね、「子も蹲石を覗く鶴鶴の次に、わしがね、」子も蹲石を覗く鶴鶴「芦丈」と続けたただわね。鶴鶴は秋季だ、いや、秋季たって、子だからいいと言ってやると、鶴鶴の子という季題は、どの季題の本にもねえと、季題の本にあってもなくて、ちいさい子のね、黄色い色のうすいようなのがね、花のちる下をね、チョンチョンと飛ぶ所を見たから、わしが付けたんで、それからそこで又一頓挫やって、その打越へもって行って、「馬の罌湯を捨てる谷川 松宇」というね、そいつは本当はまずいだね。

H 馬の罌湯ですか。馬の罌湯を捨てる谷川ね。

N だけどもあ、それを又まずいと言って

おりゃ、又へエけんかで止まっちゃまうしね。そこにまあ、馬はいねえと見りゃいいいで、我慢しておいただ、そういう風で、仲々ね、季題にばかりこだわっているだ。今度の入集のには、丸子の蕉堂(中山蕉堂)との巻でね、それにや何があるですだ。素秋が、素秋の話しないけど、素秋という、秋季で月のない秋をね、素秋と言って嫌うですだ。ウン、そりゃ芭蕉にも素秋のところがあるけど、それにやそれなりの理由があるですだ。ただ理由なしの素秋なんちうものはいけねえけど、まあ、松宇さんのやった仕事だです、そのままといたけど、そこ月を出しや、月が四つも出る巻になっちゃまうもんだで。

ウンそれじゃこれの何だね、自他、それから、おもしろいようなところ、控えはござんすか。

H ええ、ございます。

(註、これから信大連句会作品第八号、根津芦丈捌、「雪」の巻に対する自解が始まるが、あらかじめ、その作品を紹介する)

雪 根津芦丈捌

雪のバス湖の辺チェーン捲き直す 雪溪

スケート肩に人の袴く

吹きおろす風ひょうひょうと樹を枯らし高夷

郵便幾日溜めて届ける 同

宵過ぎてふと名月に気のつきて 同

川霧流るの峡の一村 明雅

秋天下コラスは山の歌ばかり 魚魯

食ひ気盛りも男なみにて 紫晃

おのづからお夏といふ名おもしろく 雅

釣りっぱなしの蚊屋のふくらむ 同

団扇いる程にもあらず松の月 芦丈

音もこまかに須磨の漣 同

漁業船拿捕のニュースを又耳に 素香

挨拶うてまはず地球儀 晃

子等はみな都に住ませぢぢむさく 香

土にははせて早き物の芽 同

花の道善の綱にも続きあて 同

巢こぼれ雀どこぞにか鳴く 水

人を呑み人吐き霞む城高く 香

写真記念にとれとすずめる 同

片言の碧い瞳夫婦もてあまし 同

シャネルファイブの薫りどこまで 雅

百姓にして客泊める家ありて 同

門の流れに洗ふひともし 同

名鐘もひびの入りしか音寒く 同

夷 勧化衆草鞋新しくはき

文 夷

魯 夷

溪 夷

同 夷

同 夷

同 夷

水 夷

香 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

同 夷

夷 大和路の空紀の路よりなほ青く

文 刺り立て頭月に照らされ

魯 柿盜む子等のしぐさを可笑がり

溪 村の祭の太鼓聞てゆる

同 強ひ酒に酔ひしれ出れば野分めき

同 黒潮のりて漁にわく浜

同 繫ぎをく牛が端綱を舐り切り

水 何の匂ひか風がもてる

香 躬恒形の硯を花に使ひそめ

同 絹糸のごとけふる春雨

同 昭和三十八年二月二日 首尾

同 マア立句のチェン捲き直す。これはま

同 あ、自でも他でもないわね。エエ、だけど、

同 雪溪さんが自身でチェン捲き直すんでもね

同 えだもんだで、一応これはまあ、そのバス

同 の運転手が、運転手だね。その捲き直して

同 いる所へ何だだ、スケート肩にした人たち

同 がぞろぞろとひしめいていると、これも他

同 他で、これは他をむかいあわせてあるだ。

同 他の向い合せ。

同 H 向い付、そういう形ですね。

同 N そうです。それからしてね。吹きお

同 ろす風ひょうひょうと木を枯らし、とこ

夷 いうのは、て留めでもらん留めでもないけ

文 どね、句柄が相当のびのびしているでしょう。

魯 H そう。うまいですね。ところで雪のバ

溪 スというのと、スケート、これはもちろん

同 冬ですね。木を枯らすも冬季で、これで冬

同 季が三句続いておりはしませんか。

同 N エエ、これは冬季が三句並んでいるだ。

同 木を枯らしだもんでね。けど、それはまあ、

同 制約から言ってもネ。夏冬は一句で捨てて

同 もよいし、三句続けてもいいという。

同 H アア、三句まで並んでいいですね。

同 これは場の句ですね。

同 N これはその場だ。それから、郵便幾日

同 溜めて届けると、これはまあ、こんなウー

同 ン、天気も悪いかいろいろなただで、こ

同 の頃まあ、去年あたりね、イヤ郵便局の、

同 その悪口も言われているが、まあ、そんな

同 なんて、それからして、宵過ぎてふと名月

同 に気のつきてと、そうするとこれは、うっ

同 かりして名月だかなんだか知らななでいた

同 がウーンあれえ月が、やあ名月だぞと、今

同 夜はまあ名月かい、ああそうかいというよ

同 うなね、郵便がたまって届くというよう

夷 幾日もその日、その場みたいなものです。

文 H 宵過ぎてふと名月に気のつきて、は気

魯 が付いたんだから、自、自の句ですね。

N ええ自です、これはね。それから川霧流る峡の一村、これはまあ場です。ほいで、川霧があつて月が見えなんだというよな、そういう味を考へることは、ことによると蕉風をふみ出すことになるでね。それはさけて考へにやなんだ。ただ川霧のといつたてね、川霧というよなものは川の上だけの霧でねえ、それで低い霧もいくらでもあるんだで、それから、秋天下コーラスは山の歌ばかり、Hこれは自にも他にもなるんですが。Nそうですねえ、コーラスは山の歌ばかりだ、これは他とみる方がいいね、ウン、ウン、それからこの句はねえ、食ひ気盛りも男なみにてという、これは娘たちばっかだ、えー、このコーラスは、Hなりません、Nおのづからお夏といふ名おもしろくという名は、このなんだ、食いざかりのね、この娘のうちそんな名があるわけだ。Hすすと食ひ気盛りはもちろん他になり、N他で、その次は他のアシライになるだ。Hアシライというのはどういう。Nアシライというやつはその前句のうちのありそなものをね、それから釣りっぱなしの蚊屋のふくらむと、Hハア、ここが付けにくかったところだし

たね。お夏というあれが出たもんで、Nこんなのはちよつとおもしろいだ、こういうふうなうけ方ね、Hなるほどフンフン、そしてこれはまあ、Nこれは恋離れになるだ。Hヤ、これは先生、うまくお付けになったと思つてね、本当に感心したんですけれど、Nこりああもう。Hどうもみんな付け煩っていましたね。ここ、Nほだでわしつけただけね、恋離れというものはね、まあ、こんなよなのがね。こりや見方によりや恋でも何でもねえけん、前句の方から言つて行くと、そのう、恋の匂いがただようだ。Hやー相当残つてますよ、見方によればウン、N恋離れちうものは、一体ね、ここで、そのまるきり人情なしの風景なんぞに、いと移つてしまはずいだ。そんななりとその匂いが何ものかあるようにね、こんな恋離れの一寸手本にいいね。Hそうですね。Nそれからこんだ、その時の風景の状況になるだ、団扇の程にもあらず松の月と、フンフンほど、その釣りっぱなしの蚊屋のふくらむというだ、松に月がさして、それからして、ほどよいその風が吹いてることがこれね、団扇のいるほどでもない涼しい、その気分のいいと、それをね、

音もこまやかに須磨の漣と、風とあつて波というじゃまずいけど、こちの方、このふくらむものがあるけど。別にまあ風という文字をもつておらないからね、まあ波が、Hとこれは音もこまやかにという、こまかにすこし叙情の味がありますか。Nまあないね、Hじゃ人情なしですね、Nこらまあ人情なしだね、音といやそりや耳にくる、そりや自、見といやあ目にくる、そりや人情だつて云つたじゃ、あらゆるものはみんな人情なわけで、それで同じなんでもね、まあ見るといふのと、まあそれから聞くという、聞くという方が人情がよほど深くなつてくるが、見るちうのは句によつては見るといつてみてもまあ人情なしに扱ふ、それからここでねーウンウン漁業船拿捕のニュースを又耳にとウンこれはね須磨の漣というのに漁業船じゃあねえ、その句によつちゃこれは物付けになつちまつてね、古風になつちまうけど、漁業船が拿捕されたということをニュースできくだもんだで、その漣と漁業船がちつともさしつかえになつちやねえだ、こういうふうにいけば、まあこんらじゃそつじやないけど芭蕉の連句には落し穴があるというのはね(以下、次号)

第四十回 猫蓑会 歌仙七卷 参加者四十七名

平成四年一月十五日
於 深川芭蕉記念館

老の春

東 明雅 捌

初懐紙

市野沢弘子 捌

深川小正月

大窪 瑞枝 捌

竹のことは竹に習はん老の春

初声ひびく門の内外

凧合戦野原かけゆく兎らとめて

豆炒なんぞボケットに入れ

弥生尽書割の月はすかひに

椅子にゆったり三毛の大猫

全身を耳に集めて電話待つ

思ひ切るには惜しきあの方

たじろがずひしと抱擁道祖神

虎魚の刺身辛味たっぷり

大統領京都に遊ぶ旅のひま

糸瓜の水の間にあはぬのど

めぐり来る沙漠千里の秋の月

明雅

雅代

利香

澄子

文子

寿子

利子

代

香

文

代

寿

利

舟音の近づく窓や初懐紙

刷りぞめの香の清き文机

ちらちらと巢籠る鳥の頭の見えて

子等楽しげに揺するふらここ

雪解道昼月淡くかかりをり

爪とぐ猫を外へ追ひやる

塩大福とげぬき地蔵で一つ買ふ

美人教官助手席に笑み

仁丹を口うつしする車酔ひ

廻転木馬故障はり紙

夏雲のインスブルック石畳

アクアラングを脱げば月差し

知性無し理性またなし政財界

弘子

健悟

清子

元子

香

志げ子

光子

悟

清

香

元

志

清

地下鉄を出れば深川小正月

春著さざめく道のあとさき

枯木立象はしきりに足踏みして

ひとつ覚えのハーモニカ吹く

十六夜の幕明け遅き村芝居

ふり塩軽くざるの枝豆

うそ寒し寺も神社もビルの中

いっしょになるわ家業継ぐなら

ほれぼれと筆跡美しき請求書

びっくり水のびん詰も置き

二十世紀の遺物となりし社会主義

媪は島に芭蕉布を織る

白砂の涼しき月をふみにけり

瑞枝

麻子

千雪

正敬

徒司

一恵

同

子

敬

司

敬

子

恵

ミイラの影がふいに身にしむ
不束な伴またまたバイク事故
気のいいをばは万事よしよし
重箱を太鼓代はりに花見酒
ルンバ・サンバも混る開帳

アルゼンチン皆が待ちし復活祭
黄金堤を犬といっしょに
着ぶくれの襟巻もんべ懐手
からの鞆で帰るトラさん
代議士は都合悪けりゃ入院し
わが一生は釣瓶落しに
いざよひは軒にかかりてそぞろ寒
マロングラッセ砂糖たっぶり
お手当は月百万の女子大生
微笑かへせば痴漢たじたじ
更級も源氏も伊勢も実践し
エイズに君は侵されにけり

陶枕の冷えのほどよくねむる爺
七十年をこぎぶりのごと
故里の山は変らず紫に
如月の空ばかり片雲
釣り上げし鹹に花の降りかかる
てんぷらにする伊豆のあしたは

利 雅 寿 代 雅 澄 利 文 香 寿 代 澄 寿 香 利 文 香 澄 文 代 澄 文 寿

社運かけたる黒鞆なり
江戸小紋型紙を彫る灯の許に
爛さまし入れ魚煮つける
戦友に誘はれてゐる花の旅
弥生尽なり棚に新刊

たもとほる山はおぼろに杜甫の詩
ごませんべいを猿に盗られて
値上げてふ朝三暮四のお小遣ひ
登校も拒否出勤も拒否
北風辻音楽師街角に
がんこ爺がくれし焼芋
エンゲージリングを抜いて逢ひに行き
刺青唐獅子熱き柔肌
ひとり酒大正浪漫夢の中
年金ぐらし辛きやりくり
川施餓鬼果てたる瀬鳴り三ヶの月
皿に糞虫見せるギャラリ

オリーブの実をもぐ少年指染めて
濃き珈琲の匂ひ楽しむ
機織りの彩糸あまた束ねられ
表紙モダンの句集もらひぬ
教会に額づきをれば花吹雪
霜くすべしてけむる村々

利 雅 弘 香 志 光 志 光 志 清 光 清 元 光 香 悟 清 香 元 光 香 悟 清 光 志 清 光 元 香

台宿入りの荷物おろしぬ
はやされていっきいきと叩る酒
代々木界限リトルテヘラン
名苑の花を仰げり甲比丹も
霞棚びく日和楽しむ

メーデーの空ゆっくりと飛行船
フォーク並びで順番を待ち
地廻りのどすをきかすもくに訛
はづれ車券の風に散り行く
遙かなる「浅草の灯」よ「街の灯」よ
黒きメツシュのタイツすらりと
売り逃げたバブルで情婦困ひ居り
菓食ひして老いらくの恋
清水昆描く河童のふくよかに
志野や織部の並ぶアトリエ
山の端の茜に浮かぶ月織し
蛸舞へり農の帰るさ

秋惜しむギターの弦を張りかへて
座りこんでるファミコンの前
母の煮る飯蛸の味やや甘く
燕かすめる理髪屋の軒
根継ぎして大樹に花のよみがへり
凶鑑ばたりと閉ぢてうららか

敬 枝 惠 子 惠 司 子 雪 子 司 敬 子 惠 司 惠 雪 司 雪 子 敬 惠 子 惠

寒餅や

成年祭

臘梅や

坂本 孝子 捌

副島久美子 捌

中島 啓世 捌

寒餅や路次の向ふは小名木川

孝子

華やぎのあふるる街や成年祭

久美子

臘梅やさざ波光る小名木川

啓世

枝さし交はし匂ふ早梅

淳子

ショール・ウインドーに手毬・羽子板

みづゑ

晴着ちらはら冬ぬき町

郁子

初トライラガーは息を弾ませて

美奈子

猫好きが二匹の子猫拾ひ来て

和久

春煖炉飾りの薪もと替へて

好敏

ピアノトレモロイヤーンフォンから

良子

あした葉貫ふ島の土産に

路子

うぐひす笛を友と吹きをり

冬乃

漆黒の壺の象嵌月に映え

和子

デッサンの仕上げやうやう月おぼろ

隆秀

おぼろ月山の端いづる旅なかば

達子

二百十日の農はせはしき

しげと

柱時計をふっと見上げる

ますみ

新車カタログ詰めしトランク

遊

下り梁腰にさげたる魚籠重く

ふみ

追分の古き軒端の酒林

よしえ

胃袋をビールが掴む一気飲み

同

娘に被せてやるやはらかきもの

和

阿修羅の像が何故か少女に

久

葵祭が逢ひ初めの縁

敏

紅をひき生きて見るかと問ふ鐘

奈

アイドルのヌード美し写真集

路

それが好きちよつとのろまでお人好し

郁

ソルボンヌにて学か男か

み

アクアラングで彼と道連れ

秀

要用的みと届く速達

遊

聖堂の鐘一斉に鳩翔ちぬ

孝

夏富士を遥かに望む我故郷

み

井戸掘りに成田飛び立つ若さあり

乃

留守居の猫が蠅を引っ掻き

と

過疎の校舎の跡形もなき

秀

覚え切れない中東の国

乃

酒壺と我はごろ寝よ夏の月

淳

月澄めり明鏡止水翁の書

路

野菜でも何でも菓子に化けさせる

達

帽の高きは料理長なり

和

むきし葡萄の匂ひかくはし

ゑ

地蔵盆覗かはずたるお月さま

同

湾岸も米も車も持ち越しに

奈

運動会ビデオ撮るので忙しく

み

ころころ太る菜虫芋虫

遊

広角カーブ体倒しつ

良

ゴルフ・マージャンほどぼにやり

久

鶴鷺ぎし祖母は大原女

敏

嫁連れて花の盛りの故郷へ

淳

八重咲きの花散り初めし通り抜け

ゑ

瀬音のみゆゆしとききぬ返り花

乃

夢うららかに育つ五つ子

和

調子をあげて鳴ける小綬鶏

同

霰ふるなり北の船屋に

世

落し物届けられるて弥生尽	オ	良	み	大正の雛とて叔母に招かるる	オ	秀	み	日本一ラガージャージー舞ふ涙
ナイフを刺せば麻薬こぼるる		孝	え	今も変らぬサブレーの味		美	え	引掻き傷の絶えぬ猫好き
土砂降りを目し波止場の灯を見に来		と	同	物乞ひの対日外交ブッシュさんの		美	同	地上げでも幽霊屋敷売れ残る
淡谷のり子は細き目のまま		奈	路	のつべら坊も客に混じりて		秀	忍び返しの内切りの門	
パークード読み取って買ふ婆の意地		和	久	床屋にて「痒いところは背中です」		敏	お座主様ロールスロイスで御到着	
恋のはじまりちよっとした嘘		同	み	消炭色に暮れる家並		乃	蛇取り男じっと居すはる	
痛いこと恥かしいこと羽根盒		奈	え	子供等が帽振り送るラッセル車		敏	抱瓶の泡盛そっと差し入れて	
セクハラ部長カラオケが好き		良	み	恋に恋した頃のなつかし		乃	回転ベッド宇宙遊泳	
写経してあとと迎へを待つばかり		奈	秀	わききにもつけてくなんしつけ煙草		敏	塾通ひリモコン操縦するママゴン	
嵯峨の竹林風の過ぎゆく		淳	み	襦袢を脱げば蛇の刺青		乃	小学生でも薄髭のある	
織月に水琴窟の澄みし音		奈	久	夢に見し月の湖上に漕ぎ出でぬ		敏	みちのくの有耶無耶の閑照らす月	
団栗独楽を貰ふ弟		淳	忍	葦のそよぎに響くオカリナ		乃	椽の実落ちる音の夜すがら	
二科会に入選したり首ひとつ	ウ	和	み	濁酒貴様と俺の半世紀	ウ	遊	うそ寒しホットミルクに膜はりぬ	
大言壮語芸の内なる		和	え	空かん集め奉仕活動		敏	六神丸を常備薬とし	
お隣の噂は何のアレルギー		と	久	張紙の求人広告住込み可		敏	白寿われ置きて主治医の逝きませり	
針の供養に人の賑はひ		淳	え	ハワイの力士似合ふ丁髷		敏	目張の煮付残る目ん玉	
遠雷に楊貴妃ざくら花閑か		孝	美	トラベルミン鞆の隅に花の旅		敏	トンネルを抜けていづれば花万朶	
朧に暮るる山のふところ		良	秀	草で拭ひし春泥の靴		遊	受話機の中に囁りを聞く	

『新炭俵』 東明雅 著

(角川書店 二、〇〇〇円)

残部僅少。

購入御希望の方は季刊「連句」発行所へ
お申し込み下さい。

(電話 〇四七一(七五)一一九二)

(振替口座 東京七一五二二三三)

初芝居

初芝居一声高く「大播磨」

きこしめしたる屠蘇の御機嫌

桜貝寄せる波とたはむれて

脇目も振らず防風を掴む

卒業の子を見送りぬ織き月

ペットショップの犬は熟睡

厄除の洗ひ地藏の列長し

ゑくぼでそれとわかる再会

ドアの鍵開けておくわと電話する

億ション下がりが万ションとなり

雷もどこに落ちるか思案して

もみほぐしたる月の酸漿

本棚の鷗外全集並べ替へ

眼鏡はづして藍茶飲む人

実践す僻村塾の匠たち

袖まで化学分析

花の奥志越調の鐘ひそか

まだ抜けきらぬ春の鼻風邪

あかり

哲

千町

杉亭

啓子

正江

シズ

子

ズ

亭

哲

江

町

ズ

江

哲

町

江

ものうげな城のあるじに昏れおそく

ヨーロッパいま国境はなし

卓囲み米をテーマにせめぎ合ひ

冗談話おちが肝要

雪しまくふつと覗きしおしらさま

襖の破れにおいらんの文

家元と牆をこえたる振付師

十円安い缶詰を買ふ

健やかに双児婆ちゃんコマーションシャル

鳥居の陰におしつこの跡

片割れの月を眺むる路次の裏

空室の窓忍草懸け

逝く秋の杭州運河やや濁り

ちちろ鳴いてる地下鉄の駅

夢ばかり描きたちまちま時の過ぎ

うすやき煎餅噛めばのどやか

遊ぶ子の青きシャベルに花の屑

山のおはひに鮎の放流

中田あかり捌

子

町

亭

哲

江

町

亭

哲

ズ

哲

亭

子

江

町

同

哲

子

子

興流連句会 二十韻

京土産

平野桜丘捌

京土産本に挟みし冬紅葉

小春楽しむ久闊の談

栄転の知らせ嬉しき挨拶に

扉より顔出す子供幼き

杉の山暮れなづみたり三日月

雲居の雁によせし玉章

肌寒の風ひとしほに人恋し

峡の村々旅芝居行く

開発はここにも及ぶ旧街道

巧く乗つたるパブル経済

サーフィンで七転八倒懲りもせず

海より昇る月は涼しく

軽々と老母を背負ひ寺詣で

戦争知らぬ世代交替

カラオケに浸りてあほる独り酒

心の痛み癒す術なき

夕されば腹へりたらん俳画描く

子猫しきりに裾を引っばる

吹き上げてまた下を逼る花嵐

霞の帯の跡絶ゆ大空

平成三年十一月十三日

於 興流会会議室

桜丘

竹無斎

閑堂

草舎

果然

彬風

齊

丘

舎

堂

然

齊

丘

風

堂

舎

然

齊

堂

風

連句会案内

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 三九四一一一四五

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後二時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マールケット下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時～三時
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター

(電) 三三四四一一九四一(代表)

＊猫養会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 江東芭蕉記念館

江東区常盤一六―三

(電) 三六三一―一四四八

雁帛往来

▽十二月一日 関口連句教室 十五名出席
明雅・徒司捌 二卓。

▽十二月四日 「季刊連句」三十五号(平成三年立机特集号)発送。

▽十二月八日 深川芭蕉記念館の三宗匠立

机式挙行。羅浮亭正江・行々子庵平朗・桃

径庵和子の三氏に立机免状・文台を授与。

▽十二月十一日 A・C・C、三つ物と花

の句について講義。

▽十二月十五日 九州柳川市に行き、どん

こ船に乗る。

▽十二月十六日 白秋記念館・お花茶屋を

見て、山鹿市に行きチブサン彩色古墳、歌

舞伎劇場八千代座を見たのも幸であった。

▽十二月十七日 田原坂古戦場を見て、熊

本に泊る。

▽十二月十九日 出水市鶴センターに行き、

真鶴・鍋鶴の大群を見る。

▽一月三日 「平成三年の連句界」を執筆

「俳壇」に送る。

▽一月八日 A・C・C、懐紙式と季題配
置表に就て講義。

▽一月十二日 柏連句会 十七名出席。四

卓に分れ、半歌仙興行。

▽一月十五日 猫養初懐紙、四十八名出席。

七卓に分れ歌仙興行。

▽一月十七日 湘南連句会へ出席。十五名

参加。二卓に分れ二十韻興行。

▽一月二十三日 電連連句部初懐紙、湯島

花ぶぶきにて興行。出席十名。

季刊「連句」第三十六号

平成四年三月一日発行

編集人 東 明 雅

発行人 東 明 雅

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方

電話 ○四七一(七五)一一九二

振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷

▽277 千葉県柏市酒井根六二六一一

電話 ○四七二(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共

一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

版

三

B6判
三三二頁
三五〇〇円

必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇句を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A 五六八〇円

国語慣用句辞典 白石大二編 B 二二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B 三三〇〇円

日本語語源辞典 堀井秀以他編 B 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 尊編 B 三三〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 A 五〇〇〇円

花柳風俗語辞典 藤井紫哲編 B 二八〇〇円

明治新語俗語辞典 榎島忠夫他編 B 三三〇〇円

難訓辞典 中山善昌編 B 三三〇〇円

名乗辞典 荒木良造編 B 二八〇〇円

名数数詞辞典 森 謙彦編 B 四四〇〇円

あいさつ語辞典 奥山益朗編 B 二八〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木崇三編 B 五八〇〇円

類語辞典 鈴木・広田編 B 二八〇〇円

類義語辞典 徳川・宮島編 B 三三〇〇円

表現類語辞典 藤原亨一他編 B 四四〇〇円

新版 文章表現辞典 神島・村松編 B 二九〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741-2